

同時開催・企画展示(2日のみ展示)午前十一時半、午後五時(創思館406号)
「小型映画の芸術―プロキノと能勢克男の時代 1927―1937」

ルンペンとプロレタリア芸術

アヴァンギャルと

ドギョウヤ

せめぎあう「物」と「身体」の
1920-30年代

立命館大学・衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム

3月1日(月) 13:30~18:00

回覧雑誌『密室』の画文共鳴 ―象徴主義とモダニズムの通路をめぐって―
木股知史 (甲南大学)

「美術」の進出 ―人形座にみる大正期新興美術運動の様態―
滝沢恭司 (町田市立国際版画美術館)

漫画からみるプロレタリア文化運動
足立元 (東京芸術大学)

自慰と尖端 ―「マヴォ」とその周囲―
野本聡 (法政大学中学高等学校)

首のない体/字面のない活字 ―印刷術総合運動『死刑宣告』の身体性―
村田裕和 (立命館大学)

《ディスカッションI》
コメンテーター：波瀲剛 (九州大学)

3月2日(火) 10:00~17:00

『亜細亜詩脈』という場 ―1920年代朝鮮における詩雑誌のネットワーク―
楠井清文 (立命館大学衣笠総合研究機構)

「不逞鮮人」へのまなざし
―1920年代初期の左傾テキストと映像におけるコロニアル意識と批判―
アンドレ・ヘイグ (スタンフォード大学大学院)

《映画上映》13:00~14:30 会場：充光館301号

プロキノと能勢克男の時代 1927-1937

ドキュメンタリーとアヴァンギャルドの越境

プロキノの研究史をめぐって ―プロレタリア映画研究のポリティックスを踏まえる―
佐藤洋 (早稲田大学大学院)

プロキノ作品における映像表現 ―『山宣渡政労働農葬』を中心に―
雨宮幸明 (立命館大学大学院)

《ディスカッションII》
コメンテーター：川村健一郎 (立命館大学)

参加自由・申し込み不要

主催：立命館大学国際言語文化研究所
プロレタリア芸術研究会

2010.3.1-3.2

20世紀のアヴァンギャルド芸術は、額縁の破壊、あるいは額縁による内容／主題への反乱でした。近代産業社会の成長とともに完成されてきた芸術ジャンルの手法や、伝達・流通のシステムが問い直されていくなかで、従来の内容／主題を構成していたものの自明性が批判的に検討されていきました。形態を説明するための「色」は、輪郭をはみ出し、盛り上がり、顔料やインクそのものの物質性を主張しはじめました。同じように、言葉も、その原料としてのマテリアルな諸要素に解体されていきます。活字は整然と一列に収まることをやめ、かつての製版印刷とはまた異なるグラフィカルな効果を生み出していきます。そうした「物」は、産業社会がうみだしたさまざまな工業生産物と交換可能な素材として、ジャンルや解釈ルールを無効化していきました。

こうした現象は、「意味」の解体というよりも、「意味」を構築するための物質の統制や知覚の制度をあらわにしてしまったのではないのでしょうか。そこでは「物」と「身体」はどのような関係におかれ、どのように互いを変容させていったのでしょうか。1920年代から30年代にいたる美術／文学／映画／舞踊…その他、既成のジャンルを超えた表現形式の試みが、社会変革のエネルギーと結びついていったことは、西洋世界だけではなく、同時代の非西洋世界においても確認されています。いうまでもなく日本をふくむ極東アジア地域は、そうした拠点の一つでした。「物」と「身体」の関係性を問い直すアヴァンギャルド芸術が、一方で、このような革命的エネルギーを内包していたのは当然のことであったかもしれません。

日本では関東大震災（1923）前後の数々がその時期にあたります。「マヴォ」の運動に象徴されるように、大正期新興美術運動が最盛期から終焉に向かうころには、一方でアナキストを排除したプロレタリア芸術同盟（1926）が結成され、全日本無産者芸術同盟／ナップ（1928）の結成へといたる革命芸術運動の急激な展開がありました。このようなきわめて混沌とした状態のなかで、それぞれの表現の模索と、社会変革のためのイデオロギー闘争が同時進行で進められていました。結果的に、多くの前衛芸術家たちは「革命の芸術」へと移行していったかのようにみえます。しかし、そうした闘争のなかには、まだまだ明らかにされていない数々の芸術的「実験」が存在していたのではないのでしょうか。

こうした問題を語る際、しばしば芸術の革命／革命の芸術という概念が用いられますが、それらは同じ地平のうえにならんで存在する別々の活動領域を意味するのでしょうか。芸術を変革することと、革命を目的とする運動体での芸術にたずさわることとは、同じ行為としてあらわされることもありうるはずですが、いかにえれば、革命芸術の実践とアヴァンギャルド芸術の推進は、重なり合う部分もあるのではないのでしょうか。また、だからこそ、多くの前衛芸術家たちが革命の「前衛」をめざしたのではなかったのでしょうか。革命運動が、生産関係を中心に「物」と「身体」の再編をめざす総合運動であったとすれば、アヴァンギャルドのエネルギーは、どのように伝達され、変換されていったのか。本シンポジウムの最大の関心の一つがそこにあります。

中野重治は、プロレタリア芸術の「形式」が争点となった芸術大衆化論争にふれて、「私は柳瀬正夢のもとでその仕事〔「無産者グラフィック」創刊号1928〕にかかっていた。柳瀬はドイツの『労働者絵入り新聞』(„Arbeiter Illustrierte Zeitung“, その略称A・I・Zが表紙にあつて、柳瀬が『アイツ』と呼んでいたのを思い出す。)なども参考にしていて、絵や写真にはさまれた三角や矩形の狭い空き地へ説明を入れるのが私の仕事で、私は苦しい苦勞してもなかなかうまく行かなかつた。〔中略〕そんな具合で、「形式」の問題は制作するものにとつて彼ら自身の切実な実行の問題なのだつた」(「二重の走り書二重の覚え書」1977)と書いています。中野は、蔵原惟人らの問題の取り上げ方に違和感を表明しつつ、その「仕事」が「AIZ」(労働者画報)と影響関係にあったことを記し、それを「制作」の問題ともいいかえていました。「AIZ」は、のちにハートフィールドがヒトラー批判のフォトモンタージュをかかげて著名となります。芸術大衆化論争のなかから生まれた柳瀬や中野らの「制作」を、グローバルに広がるアヴァンギャルドの地下茎のなかに置き直してみるとどのようなことがいえるのでしょうか。

日本でのプロレタリア芸術とアヴァンギャルドの関係は、ロシア革命初期のプロレタリア文化建設においてロシア・アヴァンギャルドが中心的な役割を果たしたのと同じようには展開しませんでした。アナキズムはもとより、ダダ・未来派的な形式も早い段階から排除されていきました。しかし、そうした歴史認識をいったん中断してみれば、何が見えてくるのでしょうか。戦前期のアヴァンギャルドの経験は、革命運動があらたな世界イメージを構築する上で、具体的にどのように摂取／詐取／搾取されたのか。あるいはまた、革命運動とアヴァンギャルドのそうした連続性はスターリニズムやファシズムによって切断されてしまったと結論づけてよいのか、アヴァンギャルドはいかに回収されたのか等々、さまざまな疑問がわきおこってきます。そもそも、「アヴァンギャルド」とは定義の一定しない流動的な領域ですが、わたしたちを饒舌にしようとする不思議な作用をいまだにやめません。本シンポジウムでは、1920-30年代のアヴァンギャルド芸術とプロレタリア芸術をクロスさせながら、さまざまな角度からの接近をこころみ、その可能性をさらに大きく開示してみたいと考えています。



関連企画 上映と展示

プロキノと能勢克男の時代 1927-1937

ドキュメンタリーとアヴァンギャルドの越境

3月2日(火) 13:00-14:30

立命館大学衣笠キャンパス充光館301号

【上映作品】

プロキノ作品

- 1.「第12回東京メーデー」(1931)
- 2.「スポーツ」
- 3.「土地」
- 4.「金線」
- 5.「山本宣治告別式(東京)」
- 6.「山宣労働葬(京都)」

能勢克男作品

- 1.「疎水 流れに沿って」
- 2.「飛んでゐる処女」
- 3.「土曜日一周年」

(予約不要/無料)

小型映画の芸術

プロキノと能勢克男の時代

3月2日(火) 11:30-17:00

立命館大学衣笠キャンパス創思館406号

【展示構成】

- 1.小型映画の上陸 9.5mmと16mm
- 2.小型映画のひろがり
- 3.パテベビーと映写機
- 4.プロキノ労働者による映画制作
- 5.プロキノ機関誌
- 6.プロキノの宣伝活動
- 7.プロキノの映像と弾圧
- 8.プロキノの発掘
- 9.能勢克男の組合と映画
- 10.『土曜日』の時代
- 11.能勢克男と戦後
- 12.能勢克男撮影機

【展示資料】※一部

能勢克男撮影機 イーストマンコダック8mmカメラ /パテベビー映写機 /大月源二「山宣デススケッチ」(複製) /東京プロキノ第4回公開ポスター(複製) /「煙突屋ペロー」上映展示 /その他